

第7回 宗門教学会議 開催報告 (前半)

宗教者はどのような発信をすべきか

二〇一八年十二月十一日、第七回宗門教学会議が開催されました。今回のテーマは、「宗教者はどのような発信をすべきか」です。

ご門主さまは、法統継承式に際して、「今日の社会状況において、今までと同じように教えを次世代へと伝えることが困難になっています。また、仏教や浄土真宗の教え、親鸞聖人に対する関心はあっても、お寺とご縁がない方も多くおられます。多くの方にお寺へお参りいただけるような取り組み、教えを伝えていく工夫が必要です」と述べられています。

宗門教学会議は、宗門内外から提起される現代的課題や問題について、先験的知見を有する有識者からご提言をいただき、宗教者の持つ知見が現代社会において、どのような位置にあり、よりよい社会の創造のためにいかなる役割を果たし得るか、宗門の確たる方向性を考えていく会議と位置づけられています。そこで、現代においてみ教えを伝えていくことが困難となってきた中で、今後どのようにみ教えを伝えていけばよいのかという、重要、かつ喫緊の課題を議論するために、本年度の宗門教学会議を開催するに至りました。

第七回宗門教学会議では、会議委員として大和証券株式会社の佐藤泰之氏、滋賀医科大学名誉教授の早島理氏、武蔵野大学名誉教授の田中ケネス氏、勸学寮頭の徳永一道氏をお招きしました。座長は浄土真宗本願寺派総合研究所長丘山願海、司会は浄土真宗本願寺派総合研究所副所長の満井秀城が務めました。

なお、報告は今号を含め、二回に分けて行います。

第七回宗門教学会議開催に先立った開會式において、まず、ご門主さまよりお言葉いただきました。その中でご門主さまは「現在の社会状況を考えると、例えば小学生と日頃から総会所で聴聞されている年配の方に同じ話をしても、それが正しく伝わるとは思いません」「情報を届ける相手の立場を理解し、その立場に立って、理解できるもの、利用しやすいものを発信するということ」「私たちの宗門は、今まで歴史の中で積み上げてきた本山本願寺を中心とした組織という大きな力をもっていきます。これを今の時代に合わせて適切に運用することができれば、必ず、これからの時代においてもみ教えを広く伝えていくことができると思います」とお述べになり、宗門における現況の課題や今後見据えるべき方向をご示唆になりました。

続いて石上総長より、挨拶がありました。

「宗門教学会議」総長あいさつ

ただ今は、ご門主さまから本日の会議の趣旨、願いにつきまして、適切、厳しいお言葉を頂戴し、私ごときがあらためてごあいさつを申しあげる必要はないように痛感いたしました。恐縮ながら、少し用意しておりますので、読ませさせていただきます。

本日は、ようこそ宗門教学会議へご参集くださいました。この宗門教学会議は、宗門内外から提起される現代的課題、および種々の問題等について、さまざまな領域で先進的知見を有す有識者の皆さまから、それぞれの課題に基づいて動向の把握、分析と提言をいただき、宗教者が持つ知見が現代社会においてどのような位置にあり、よりよい社会の創造のために、いかなる役割を果たし得るか、宗門の活動の方向性を考えていく上で重要な会議として位置付けられております。

ご案内のとおり、本日のテーマは「宗教者はどのような発信をすべきか」です。先般、ご案内のとおり、真宗教団連合により実施されました浄土真宗に関する実態把握調査において、本願や往生など、浄土真宗のみ教えを示す重要な言葉の認知度が一般社会において極端に低下している状況が明らかになりました。

この傾向は、寺院にご縁のない方々はもちろんのこと、ご縁のあるご門徒の皆さまにも該当する課題となっております。つまり浄土真宗のみ教えの根幹を示す言葉が十分に現場に伝わっていない、理解されていないという厳しい現実が指摘されているのです。

この問題は、先年発表いたしました、「10年、20年後の日本社会で求められる僧侶像・寺院像答申書」(『宗報』二〇一六年十一月合併号)において、ご門徒に対してはもちろんのこと、各寺院

にご縁のない方々に対して、いかにはた
らきかけていくのかと指摘されている問
題とも深く関わる重要な課題です。

「ご門主さまは、法統継承に際してのご
消息において、「宗門の現況を考えます
時、各寺院にご縁のある方々への伝道は
もちろんのこと、寺院にご縁のない方々
に対して、いかにはたらきかけていくの
かを考えることも重要です。本願念仏の
ご法義は、時代や社会が変化しても変わ
ることはありませんが、ご法義の伝え方
は、その変化につれて変わっていくか
ならないでしょうか」とお述べになってお
ります。

刻々と変化する現代社会において、
「ご法義の伝え方」「現代人に届き、響く
言葉」の模索を間違えないように、かつ
迅速に考えを深めていく必要があります。

宗門では『本願寺新報』や『宗報』、
『大乘』などの刊行物をはじめ、各教区
の教区報や、お寺の会報である寺報な
ど、さまざまな媒体で宗務連絡や行事、

浄土真宗の教えや歴史などを発信してお
ります。

これらの情報発信は比較的多くの寺院
で活用されておりますが、先ほどの実態
把握調査に照らして考えるとき、宗門外
はもとより、宗門内にいるご門徒の皆さ
まにも周知されているとは言えない状況
があります。

特に、寺院にご縁のない方々に対する
アプローチは、残念ながらほとんど行き
届いていないと言えるでしょう。また、
ホームページやSNSなど、インターネ
ットを活用した情報発信の活用は現状で
は十分ではないと言わなければなりません。
ん。

そして、より大切なことは、適切な発
信方法を構築するとともに、宗門内外の
方が本当に必要なとしていることを的確に
判断していくことです。人々がどのよう
な苦しみや悩みを持ち、どのような言葉
や情報を求めておられるのかを探ってい
くことは不可欠なことです。

宗門として必要不可欠な内容や、これ

だけは知っていたらきたいという思いを
込めた情報をどのようなかたちで発信し
ていくのか。そして、その情報がいかに
一般の方々の求めに応じたものとなるこ
とができるのか。すなわち、伝えたい内
容を伝わるかたちで発信する方法を模索
していかなければなりません。

以上のことから、本年度の第七回宗門
教学会議は、「宗教者はどのような発信
をすべきか」をテーマとさせていただきます
ました。本日のご議論が現代社会に浄土
真宗のみ教えが響き渡る機縁となります
ことを切に念じております。

ご多忙のなか、ご参集をいただきまし
た、佐藤泰之先生、田中ケネス先生、早
島理先生、さらに徳永一道勸学寮頭に深
く感謝を申し上げます。本会議の重要性
をご理解賜り、宗門の新たな未来を開く
ために皆さま方のお知恵を賜りますよう
重ねてお願いを申し上げます、一言私
のごあいさつとさせていただきます。ど
うぞよろしく願います。

発題一 佐藤泰之氏

大和証券株式会社、営業サポート部法人開発課の佐藤泰之と申します。昨年、真宗教団連合事務局よりお声掛けいただき、「浄土真宗に関する実態把握調査」(以下、実態調査と略称)のお手伝いをさせていただくことになりました。今日は限られた時間でございますが、本日のテーマである「宗教者はどのような発信をすべきか」と関連するポイントをご説明させていただきます。

実態調査の概要

この実態調査の目的は、今後の教化活動に資する基礎資料とすることです。そこで、現代社会から宗教・浄土真宗が何を求められているのかを一般の方(宗派問わず無作為に抽出された人、以下、「一般」と表記)と真宗の門徒(真宗十派の寺院に所属している門徒、以下、「真宗十

派」と表記)とに分けて調査しました。

調査方法はインターネットを使った形式です。現在、日本におけるインターネット普及率は全体で八十三・五%です(総務省「通信利用動向調査」)。この普及率の高さを考えると、情報発信するにはインターネットが不可欠であると言えます。発刊物などの紙媒体での情報発信においても、インターネットとミックスさせることは不可欠な状況になっていることをご認識いただければと思います。

仏教信仰のきっかけ若年層の特色

それでは、調査の内容に入ります。仏教信仰のきっかけについて調査したところ、若年層で特色のある結果が出ました。それが「僧侶の話を聞いて」という項目です。二十代の「一般」が二・七%に対し、「真宗十派」は十三・二%とな

りました。この結果、「真宗十派」と「一般」の異なる点は、僧侶の法話を聞く機会であり、特に大きな変化が表れるのは若年層であることが窺えます。

もう一つ、学校での学びがきっかけとなっている若年層が「真宗十派」では十一・〇%、「一般」では八・一%でした。先ほどより大きな乖離かひりは見られませんが、学校の授業は必ず聞かなければいけないので、必然的に仏教と接点を持つこととなります。接点があれば信仰心が高まるという証左にもなっています。宗門校の存在意義は高いことがわかります。

「伝える」と「伝わる」

教えを伝える相手はどのような人たちなのか、を理解していただくために、ここから「価値観・宗教全般に関する意識・実態」に関する調査結果をお伝えします。

人生観に関する設問の中、特に「仏教



を学べば人生観が変わる」という項目で、「一般」が十八・一％に対して、「真宗十派」は三十・八％と非常に顕著な結果が出ました。「真宗十派」の中でも比率が高いのは二十代、三十代です。

宗教に求めるものは「先祖の供養」「こころの安らぎや癒やし」が突出しており、特に「真宗十派」では大きな傾向が表れています（次頁、会議資料18「宗教に求めるもの」）。また、浄土真宗では説かない「人が死ぬと霊魂が死後の世界に行く」という項目も、「真宗十派」の二十代、三十代の回答率が高いです。こ

こで、重要視すべきことは、正しい教えと正しい理解です。「伝える」ではなく「伝わる」という点です。「伝える」は一方通行で、「伝わる」は双方向です。理解したかと確認することが「伝わる」こととなります。後で触れますが、真宗特有の言葉の認知度が低いことは、「伝わる」ではなく「伝える」ことが要因の一つとして考えられます。説明や言い方を変えても問題にはなりません、本質が誤って伝わることは致命的です。

もう一つ、「仏教を学べば人生が変わる」と回答している「真宗十派」の若年層は、浄土真宗の正しい教えをいただきたいと考えている層だと思えます。僧侶が伝えなければ誰が正しい教えを伝えて

くれるのかということが課題として挙げられます。

真宗の言葉に関する認知状況

真宗についての言葉の認知状況を調査しました。表の上段が「詳細認知」で「意味や内容まで理解している」と回答した人、下段が「名称認知」で「名前だけ知っている」と回答した人の比率になります。さすがに「浄土真宗」「南無阿弥陀仏」という言葉は、かなり高い数値が確認できます（次頁、会議資料20「浄土真宗についての認知①」）が、一方で、「門徒」「報恩講」「御同朋」などで、文化や生活に根ざした言葉についての認

佐藤泰之氏

【略歴】

大和証券株式会社 営業サポート部 副部長 法人開発課長 公益法人担当。
 （公財）全日本仏教会・大和証券協働「仏教に関する実態把握調査」の分析を担当。真宗教団連合「浄土真宗に関する実態把握調査」の分析を担当。

詳細編

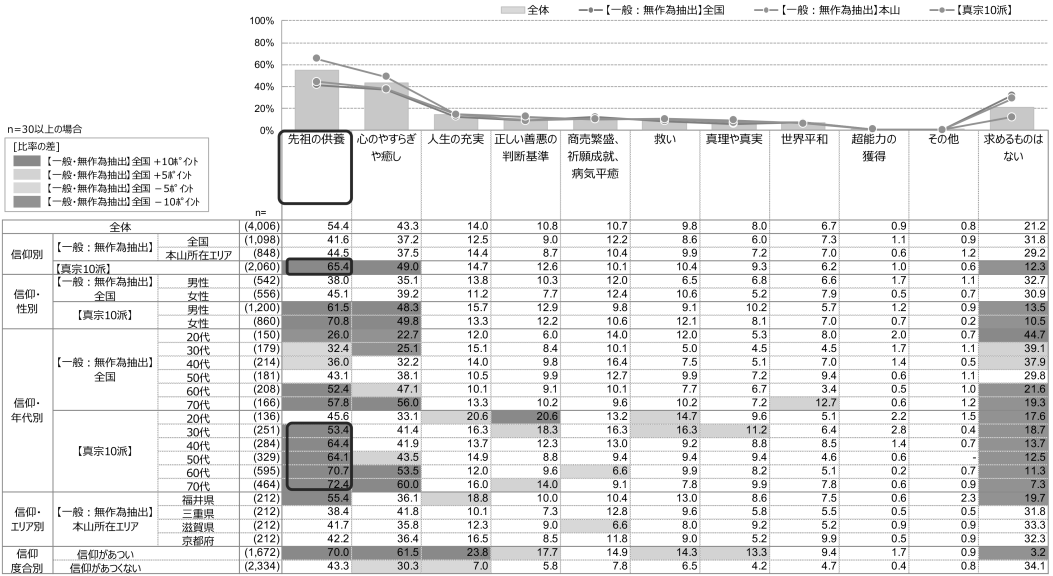
宗教に求めるもの



Q7 あなたが宗教に求めるものとはどのようなことですか。以下の中からあてはまるものを全てお選びください。

MA

※全員ベース



浄土真宗に関する意識・実態

浄土真宗についての認知①

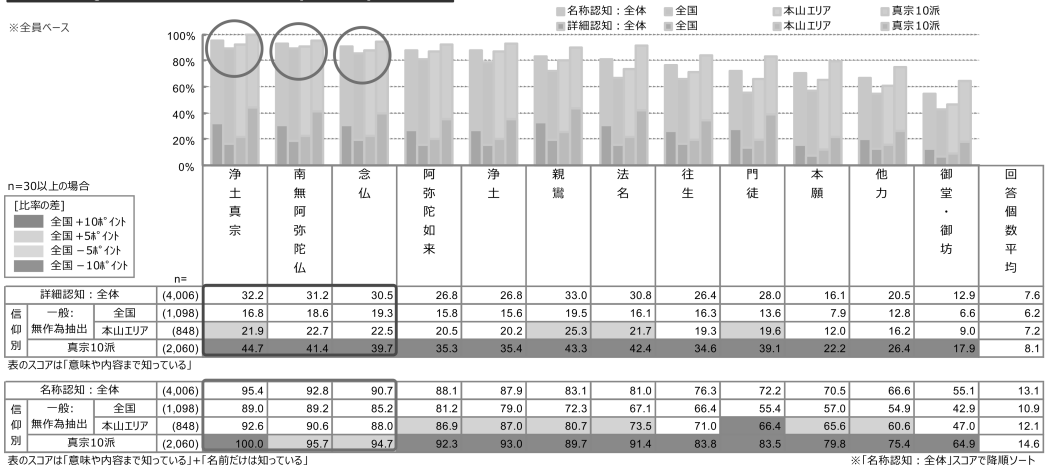


浄土真宗についての認知で上位に挙がるのは、「浄土真宗」「南無阿弥陀仏」「念仏」。上位に挙がった項目の名称認知は9割前後と非常に高いが、意味まで理解している割合は半数以下となった。

- 名称認知が高いのは、「浄土真宗」「南無阿弥陀仏」「念仏」「阿弥陀如来」「浄土」の順。
- 詳細認知が高いのは、「親鸞」「浄土真宗」「南無阿弥陀仏」「法名」「念仏」の順。【詳細編25～26p参照】

Q14：浄土真宗についての認知(上位項目)

※全員ベース



知度は、七十代は高く、二十代は低い状況です。二十代は、自らの関心から知識として浄土真宗に触れている人が多いことが想定されます。自発的に二十代が関心を示している今が、本来大きなチャンスなはずです。

「名称認知」が低いものは、当然ながら名称を知らしめることから始めることが必要になります。知らない言葉で説明されても意思疎通は困難です。先ほどと同じく、本質を変えずにわかりやすい言葉を用いて説明するなど工夫することが大切な要素になっております。

報恩講

次に、浄土真宗本願寺派で大切にしている報恩講の調査結果です。図表をご覧ください（次頁、会議資料24「報恩講の参拝経験②」）。ここで注目するのは、報恩講に参拝したことはないが、「機会があれば参拝したい」回答者です（表のうえから二段落目と三段落目）。大きな違いは、寺

院からの案内があるか、ないかです。また、報恩講で住職・寺院から声がかけられていて、かつ「宗派・本山行事の情報は得ていない」は二十一・七%でしたが、声がかかったことはなく、「宗派・本山行事の情報は得ていない」は四十六・三%でした。お寺が声掛けしなければ、浄土真宗本願寺派のHP情報を見ず、宗派の帰属意識の低下につながっていくということが想定されます。

宗派への帰属意識が低い方に情報提供をすることも必要ですが、報恩講に参拝したいという意識のある方に情報提供をしていないことが、かなり大きな問題です。では、情報提供はされていないが、機会があれば参拝したいという層はどうなっているかといえ、**「真宗十派」**の二十代〜四十代に高い傾向が出ています。案内すれば参拝する可能性の高い大切な世代と言えます。

僧侶の皆さまに報恩講の案内についてお聞きすると、家長に案内をしていると言われます。ただ、家長は誰なのか、そ

の家には二十代、三十代は同居しているのか、同居していない息子・娘には情報は伝わっているのか、こうしたことを気に留めていただくことが重要です。今できることとして、現在帳などを整備し、メール配信で案内するなど、若者に合わせた情報発信も大切なことです。

僧侶に対するイメージ

「僧侶に対するイメージ」について、「一般」も「真宗十派」も、特に二十代が真宗僧侶に対して「親しみがある」結果となりました。真宗僧侶は若い世代に良い印象を持たれていることがわかります。人間の性質として、親しみやすい方からの情報提供は素直に受け止めることもあります。これが浄土真宗の強みです。

「信仰していてよかったと思う場面」で、「真宗十派」は特に、法話を聞いたときに「信仰していてよかった」と感じる傾向が強くなっています。日頃の努力の

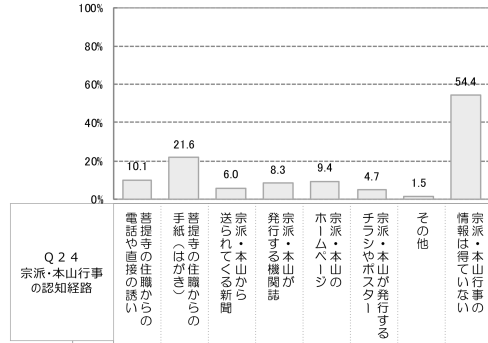
浄土真宗に関する意識・実態

報恩講の参拝経験②



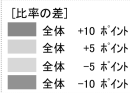
浄土真宗信者で、「浄土真宗の寺院が行う報恩講への参拝経験」と「宗派・本山行事の認知経路」との相関関係を抽出した。

- 報恩講の参拝経験や、「機会があれば参拝したい」という要望は、宗派・本山行事を含む住職からの日常的なはたらきかけが大きく影響している。
- 住職からのはたらきかけが、「機会があれば参拝したい」につながる要因として、「宗派・本山が発行する機関誌」の活用が有効に作用している。
- 寺院からの案内がないもの、「機会があれば参拝したい」という人は、宗派・本山のホームページから情報を得ている傾向が高い。
- 報恩講に「機会があれば参拝したい」という要望と、「宗派・本山行事の情報を得ていること」には、一定の相関関係が認められる。



※浄土真宗信者ベース

n=30以上の場合



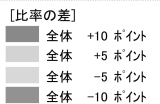
全体	n=	10.1	21.6	6.0	8.3	9.4	4.7	1.5	54.4
参拝したことがある	(563)	21.4	32.7	12.1	14.1	12.6	9.4	3.1	31.7
参拝したことはないが、機会があれば参拝したい(寺院から案内があった)	(296)	14.9	43.8	7.5	18.6	14.9	6.4	1.0	21.7
参拝したことはないが、機会があれば参拝したい(寺院から案内がなかった)	(268)	8.9	20.6	4.5	9.7	16.8	5.2	1.1	46.3
参拝したことがなく、今後も参拝する予定はない(寺院から案内があった)	(245)	7.0	26.6	10.5	7.4	7.4	5.3	1.2	45.7
参拝したことがなく、今後も参拝する予定はない(寺院から案内がなかった)	(362)	5.1	8.3	1.5	1.9	3.6	1.1	1.9	78.9
報恩講を知らない	(700)	3.3	8.7	1.7	2.3	5.4	1.6	0.6	80.1

ご参考

菩提寺からの情報提供



n=30以上の場合



		n=	年忌法要のお知らせ	彼岸法要やお盆法要等の案内	寺報	季節の便り(暑中見舞い・年賀状等)	左記以外の内容での手紙やはがき	SNSでの情報発信	メールマガジン	その他	特に連絡や情報提供はない
全体		(820)	35.5	32.9	26.3	17.1	6.9	0.9	0.4	0.7	44.0
性別	男性	(439)	35.7	31.6	27.1	19.4	9.3	1.0	0.6	0.4	44.1
	女性	(380)	35.3	34.5	25.3	14.5	4.2	0.7	0.2	1.0	43.9
地域	都心	(348)	28.1	28.5	19.6	15.4	3.8	1.2	0.4	0.6	52.2
	地方	(472)	40.9	36.2	31.2	18.4	9.3	0.6	0.4	0.7	38.0
年代	20代	(63)	22.5	16.0	19.0	16.5	8.4	1.5	2.3	0.0	56.3
	30代	(97)	18.7	14.6	13.8	10.2	2.8	1.6	0.0	0.0	67.6
	40代	(139)	29.3	21.0	16.6	15.5	4.7	2.0	0.8	1.1	54.3
	50代	(142)	37.0	31.2	26.3	12.2	7.2	0.0	0.0	0.5	40.4
	60代	(216)	47.2	51.1	36.9	23.3	5.9	0.9	0.4	1.6	27.5
	70代	(163)	39.0	38.3	30.8	18.9	12.0	0.0	0.0	0.0	41.4
家族	長子/兄弟姉妹なし	(451)	38.2	37.4	30.3	19.0	7.3	1.2	0.8	0.5	39.4
	長子以外	(368)	32.1	27.5	21.4	14.8	6.5	0.4	0.0	0.9	49.7

仏教に関する実態把握調査報告書(公財)全日本仏教会、大和証券(株)より大和証券作成

成果が表れていると言えるでしょう。浄土真宗本願寺派が取り組まれている僧侶の質の向上については、真宗門徒の「信仰してよかった」という回答に大きく表れると思います。

特に法話は、「真宗十派」の多くが「感銘を受けた」と回答しています。それでは、真宗を信仰する人以外の人たちに法話を聞いてもらうための機会をどうつくり出すのか。法話を聞いてもらえれば効果が高いことはわかりますが、どうやって機会を生み出すのかという問題につきあたります。

情報提供の重要性

最後に、所属寺からの情報提供です。全日本仏教会と大和証券の協働でおこなった「仏教に関する実態把握調査」の結果をご紹介します（前頁、「菩提寺からの情報提供」）。やはり二十代～四十代は、情報連絡が欠けています。長子（長男や長女）以外も連絡が低い結果となっ

ています。こうした情報提供が滞^{とどお}ると何が起きるのか。端的に言えば、お寺の満足度が下がります。お寺からの情報提供がない場合、門徒の満足度が低下するということが明らかに傾向として出ています。

新しい人たちとの接点はもちろん大切ですが、現在の門徒や身内の方との関係性が崩れないようにすることも大切です。新幹線や飛行機等の交通手段は発達し、お寺と門徒宅との物理的距離や時間は縮みました。インターネットが発達し

情報伝達も縮みました。ただ、人と人のこころの距離が離れてしまっている。これが縮め切れないというのが現状です。

コミュニティとしての寺院、相談を受ける僧侶の役割というのは今後ますます重要になります。僧侶の側から一歩歩み寄っていただき、門徒とのこころの距離を縮めていただければと思います。私を含めて、本当に素晴らしい仏教の教えというものを伝えていただきたいと思っております。

発題二 早島 理氏

早島でございます。私は龍谷大学にお世話になるまでは国立の大学に勤めていました。特に医学部で医の倫理を担当し、医学医療関連の先生方や学生諸君と接することが多かったので、そのことを基に少し考えていることを述べてみたいと思います。

テーマとしては、特に仏教と医療が語る老病死について、ことばが持っている一般性と個性性というところに焦点を当てて考えてみたいと思います。

医療が語る老病死

昨年より、医師の占部まり先生（内科

【医療】

- 病院・医者が存在することで地域・住民が安心できる
- 病院・医者に対する地域の信頼感
- ◎ 心身が不調の時、医療機関に掛かるという社会全体の共通認識

- ・自然科学/生命科学
- ・客観的対象としての患者
- ・Evidence Based Medicine (EBM)

普遍性
必要条件

マニュアル
ガイドライン

- 医の倫理(医者・患者関係)
- 主治医などと患者・家族との信頼関係・意思疎通
- コミュニケーション能力(ことばと想い)

- ・個別的具体的存在としての患者
- ・個々の患者家族にふさわしい対応の仕方
- ・Narrative Based Medicine (NBM)

個別性
十分条件

個別的発信・提示

医、宇沢国際学館取締役）と接することがあり、さまざまなか議論をしました。先生は昨年の秋に「死に逝く人に医師は何ができるのか」（月刊保団連 No.125/2017, 11）という論文をお書きになられています。医師は治すことが仕事ですが、治し切れないときに医師だけではどうにもならないことに気づき、今一度、超高齢・多死社会における医療のあり方とその分析調査を社会的共通資本という視点から考え始められました。

占部先生のお父様は宇沢弘文先生（一九二八―二〇一四、東京大学名誉教授）で、文化勲章も受賞されたご高名な経

済学者です。宇沢先生は「社会的共通資本」を提言され、特に社会的共通資本のうちの「文化的共通資本」として、医療と教育について著作や論文を通じてさま

ざまな発言をされています。占部先生にお会いしたとき、この文化的共通資本として宗教・仏教をどのように考えているのかをお聞きしました。宇沢先生ご自身は、文化的共通資本として医療・教育・宗教を考えていたようですが、宗教の部分についての研究成果は発表されていなかったもので、その部分を今占部先生が考えているということで私にコンタクトがあったようです。

占部先生との話を私なりにまとめますと、医療が文化的共通資本として成り立つのは、たとえ今患者として通院や入院をしていなくても、病院や医師が地域に存在することで地域や住民が安心して生活できる。つまり、それが社会的共通資本ということの具体的な表れです。そしてそれが成り立つためには、病院や医療者に対する地域の信頼がなければなりません。また身体やこころが不調のときには病院に出かけて治療を受けるといのが社会全体の共通認識として存在していて、それを支えているのが自然科学、特



に生命科学としての医学医療です。

ただし、この場合の患者は、あくまでも客観的・一般的対象としての存在であり、さまざまな医学的なデータの数値の対象となるものです。これを医学の方では、「Evidence Based Medicine」(根拠に基づく医療)という言い方をします。しかし、ここ十五年ぐらい、これだけでは医学医療は不十分であるということに気が始め、医の倫理で「医者・患者関係」ということを強く意識するようになってきました。医学教育で特に問題になっているのは、主治医などの医療者と患者・

家族との信頼関係・意思疎通のためのコ

ミュニケーション能力です。医療者が患者の具体的な状況を患者・家族に的確かつ客観的に伝え得るかという言語能力が大きく取り上げられるようになりました。患者一般ではなく、一人ひとりの患者にふさわしい対応、患者・家族の個性に対応した説明、あるいは、一人ひとりの患者の生き方や死に方の考え方に沿った説明ができるかどうか。これを「Narrative Based Medicine」(物語と対話による医療)と言い、今はこの両方が必要ならば医学医療の臨床現場は成り立たないという状況になってきています。

仏教が語る老病死

次に文化的社会資本としての医療のあり方と比較しながら寺院・僧侶の立場を考えてみます。まずご法義を伝えるための前提や必要条件として、寺院と僧侶が存在することで地域住民が安心できるということがあげられます。お寺があり僧侶がいてよかつたという地域の思いです。それは僧侶に対する信頼感の問題でもあります。具体的には、一般の方々に生死しやうじの悩みや死んだらどうなるのかというスピリチュアルな問題、宗教的な救いの問題が生じたときに、自分のお寺や住職に相談しようという共通認識が現在

早島 理氏

【略歴】

滋賀医科大学名誉教授。長崎大学教育学部、滋賀医科大学医学部を経て、二〇一二年より二〇一八年まで龍谷大学文学部教授。博士(文学)。専門は、インド仏教学、医療社会学、生命倫理。

の社会に確かにあると、僧侶が自信を持って言えるかどうかの問題です。あるいは生死の悩みや宗教的救いの問題が生じたときは、僧侶に相談するという社会全

【仏教】

- お寺・僧侶が存在することで地域・住民が安心できる
- お寺・僧侶に対する地域の信頼感
- ◎ 生死の悩み、スピリチュアルな悩み、宗教的救いの問題が生じた時、お寺・お坊さんに相談するという社会全体の共通認識

・人文科学、哲学・宗教・仏教思想、親鸞教学
・社会共同体における 寺院・僧侶の役割

普遍性
必要条件

- 門徒個々人と寺院・僧侶との個別的、具体的なつながり
- 悩み・愚癡を聞く(傾聴)
- 教え・救いを伝える個別的な「ことば」と「想い」

・「ことばと想い」への継続的問いかけ
・個々人の救い(親鸞いちにんがためなり)
・ともに念仏者

個別性
十分条件

個別的発信・提示

いうことを常に問いつけることが必要です。社会的共通資本といいながらも、実際には一人ひとりが解決を求める悩みや救いに具体的に対応しなければならな

体の共通認識をわれわれ僧侶がどのように築き上げていくのかという課題でもありません。これは医学・病院・医師と比べたときに、仏教・寺院・僧侶側の弱いところではないでしょうか。こうした問題をわれわれは抱えているのです。

また、仏教やお寺・僧侶が文化的共通資本としての役割を果たす、あるいは社会を支えていく具体的な在り方として要求されるのは、ハウツー(How to)ものとかマニュアル的な、一般的な対応策ではなく、個々の具体的な問いかけ、この人のこの悩みにどのように対応できるだろうかとい

宗教者はどのような発信をすべきか

い。そうした、ある意味矛盾している問いかけ(一般性と個別性)を両方ともに考えていく必要があると思われま

私は長崎大学や滋賀医科大学・龍谷大学などで若い人たちと接してきました。佐藤先生のデータにもありましたが、若い人たちの仏教に対する潜在的な要望や要請はすいぶん強い気がいたします。そうした要望の具体的な内容に気を配りながら、個別的に対応していく必要があると思っています。

最後に幾つかの具体的な提案をしたいと思えます。医療関係者との会話で気付かされたのは、同一のテーマを僧侶のみの内輪の議論にとどまるのではなく、他職種の人たちと一緒に考えていく必要があるということです。

「生老病死」は仏教の基本的な教えです。その老病死が頭わになる緩和医療の場では、死に逝く患者に医師は何がで

きるか、そのときに患者とその家族を支えるのは誰なのかが問われています。それは医療者とともに仏教者なのです。医師がいて僧侶もいるというように、さまざまな職種の人たちと一緒にできるだけオープンな人たちで話し合って、患者・家族や地域の人たちを支える必要があります。

たとえば、「認知症」は老病の最たるものです。現代ではこの問題を抜きにして生老病死の老や病を語ることはできません。そうすると、老や病を語るときに僧侶は何ができるかという話になります。認知症を老病の視点から仏教ではどう考えているのかを提示しながら、具体的に臨床に携わっている医師やケアマネジャー、福祉関係の人たちと一緒に意見交換をする。そしてその成果を地域に還元することが重要です。われわれ研究仲間の僧侶の一人は、自身が所属する寺院の法要のときに、警察と銀行の方に来ていただき、振り込め詐欺の問題を話す場を設けました。認知症という「老病」が

引き起こす具体的な問題（振り込め詐欺）から入って、それと併せて仏教が「老病」をどのように受け止めようとしているのかを共有する。こういうあり方ですと、自分のところの門徒さんだけではなく、その地域の方が会場に来るようになります。認知症の問題や緩和医療という同じ共通のテーマで医療関係者と、あるいはテーマによれば警察や銀行の方や弁護士の方などと一緒に話し合うことも必要かと思えます。

会場にしても、お寺などの宗教施設だけでなく、公共施設でもさまざまな議論の場を設ける必要があるでしょう。少し紛らわしいですが、「お寺のある地域」と「地域にあるお寺」といった考え方があります。現在、地方の病院は生き残りを懸けてさまざまなことを試みています。大都会の大きな病院は、人々がその病院に出かけるといって「病院のある地域」ですが、地方では単独での存続が困難なところが生じ、地域と一緒に病院が機能するという「地域にある病院」とい

う考え方が出てきました。これを参考にすれば、お寺にどうやって地域の人に来てもらおうかというのと併せて、地域の中のお寺、地域活動の場の一端としてお寺がある。この両方の立場がこれから要求されるだろうと思っています。

現代が抱えている様々な苦悩は、釈尊が語られた生老病死の問題の具体的な表れです。したがって、医師ができることと並んで、われわれ僧侶には何ができて何ができないのか。そして、できる範囲でどのような発言をしていくのか。また、できないことに対しては、できる人たちと一緒にタッグを組む。それが今風に言うと、地域が地域を支えるということになります。その一端として僧侶やお寺の役割があるのではないか、そのようなことを今考えています。

発題三

田中ケネス氏

本日のテーマは「宗教者はどのような発信をすべきか」というテーマです。私は、経済的な「需要」と「供給」という用語で考えると、僧侶はやはり「供給する」立場にいると思います。一方、需要する立場から考えますと、先進国の宗教形態が「信じる宗教」から「目覚める宗教」に変容していることに気がつきます。その背景には、現代社会の変化があるのです。

現代社会五つの特徴

現代社会には、平等化、理性化、多様化、世俗化と個人化の五つの特徴があると考えます。最初は、男女の平等化、及び僧侶と在家者の平等化です。次に、理性的な科学思考で教育されている我々には、理性化が顕著になっています。三つ目は、生き方、考え方、価値観、及び民

族や国籍の多様化の高まりです。次に、世俗化です。直葬など、仏教が葬儀に関わらなくてもいいということは、世俗化の現れだと言っていると思います。要するに昔と比べると、宗教は社会において相対的に力を持たなくなってきたのです。これは世界的な現象です。アメリカでは六十年前、宗教に所属していない人はたったの1%でした。しかし、今は二十三%で、四十歳以下では三十三%です。最後に、個人化です。以前、宗教は家族単位のものであったのですが、今は宗教の営みも非常に個人化しています。

「Golden Chain・黄金のチェーン」

それでは次に、アメリカ仏教における社会性に触れたいと思います。「Golden Chain・黄金のチェーン」という、アメリカの浄土真宗のお寺で、子どもから大

人に愛用されている教章のようなものを紹介します。一九二〇年代にヨーロッパ系アメリカ人の女性僧侶がハワイで作成したものです。そこで、どういう特徴があるかと言うと、「Love・愛」という言葉を使っているところにあります。

Loveという言葉は、仏教では「愛欲」と言っただけで否定する傾向にあります。しかし、教えを「需要」する側にいるアメリカ人にとっては、Loveはこころを揺さぶる魅力的な言葉なのです。従って、阿弥陀仏の「黄金のチェーン」の本質が愛であるということが魅力的になるのです。仏教では普段、Compassion（慈悲）という言葉が一般に優先されますが、Loveとは異なり、もともとラテン語系の言葉で知的過ぎる側面があります。ですので、「黄金のチェーン」では採用されなかったでしょう。

また、「私は、清く美しく考え、清く美しく話し、清く美しく行動する」とあるように、三業（さんごう身口意）の教えは、特に子どもたちに好まれるようです。宗教



教育の観点から、子どもたちの道徳・倫理的なニーズ・需要を満たすことは重要であり、好まれるのです。これは、自分の宗教に基づく道徳・倫理のニーズをほとんど必要としない日本とは、状況が異なるのです。

アンケートが示す需要

次に、アメリカの浄土真宗の門徒さんに行ったアンケート結果をご紹介します。四十六人の門徒さんに、「あなたにとって阿弥陀仏はどういう意味を持ちま

すか」という問いです。回答は、「西方浄土に存在する」がほんの七人でした。それ以外の人は、「智慧と慈悲の象徴」、または「日常生活内にはたらくいのちの人格化」と回答しています。「浄土」に対しても同じように、「十億土のあなたにある場所」という人は、たった二人です。つまり、どう捉えるかということ、二十九人は「場所 (place) ではなく、仏となれる涅槃ねはんに等しい状態 (state)」と回答しています。また、「ところが、清しやう浄じやうされた状態の表現」という回答は、

アメリカでは、『維摩経ゆいまぎやう』や禅宗的な浄土の捉え方が強いからかなと思います。この結果を見て、私は、門徒さんたちの捉え方は、「目覚める宗教」的であると

言えると思います。つまり、二元論ではなく、一元論的な理解が主流となっているのです。

伝道における四つの観点

それでは、ここで伝道という課題ですが、私は英語で、「What (何を)」「Whom (誰が)」「Who (誰が)」「How (どのように)」という四つの観点から見ていく必要があると思います。

最初の「What」とは、「何を」提供するかということです。お寺、僧侶として提供できるのは、先ほどの「浄土真宗に関する実態把握調査」(以下、「調査」)にありましたように、お寺・仏教・僧侶に

田中ケネス氏

【略歴】

武蔵野大学名誉教授、浄土真宗本願寺派総合研究所委託研究員、及び大正大蔵経英訳編集委員長(仏教伝道協会)。国際真宗前会長及び日本仏教心理学会前会長。

求めることで最も高い要望は、「先祖供養」と「丁寧な葬儀や法事の執行」でした。この点は踏まえておかないといけないと思います。しかし一方、「調査」で参加したい行事・イベントは何かと聞いたときに、自由記述で、「法話・講演など、教えに関する行事」が一番高かったのです。ですから、お寺のイメージとしては、これはアメリカ的なイメージかもしれませんが、ビッグ・テント (Big Tent) と言って、「仏法という柱」に支えられている大きなテントでなければならぬと思います。上記の主な二つの「What (何を)」を中心として、地域の社会の課題や日常生活の問題などという需要にも、大きなテントの下で応えるべきなのです。

次に、誰がターゲット・対象になるかという「Whom (誰に)」です。まず「調査」によりまずと、死者儀礼を求める人の数は五十から六十%でした。やはり多くの日本人にとって、先祖供養は最も大切なものなのです。次に、人間関係

や日常問題の解決を求める人に対応するべきでしょう。現代人の多くは、この世のニーズに関心があるからです。第三のグループは、救い・信仰心を求める人々であり、前の二つに比べると、どの時代でも少ないのです。「調査」でも、たった十%でした。しかし、親鸞聖人の教えを伝える我々としては、最も重要な方々なので大切にしなければならぬと思います。

次に、「Who (誰が)」が提供するかどうかです。もちろん僧侶となりますが、「調査」では三十五%の僧侶の行動・態度・姿勢に、不満を持っているとありました。そこで言うまでもなく、僧侶の質を高めなければなりません。その他に、私の提案としては、まず在家出身の僧侶たちを増やし、彼らが住職になれるようにしてもらいたいと思います。また、女性僧侶がもっと伝道できる場を設けてもらうことよって、教団内では相互に刺激する種々な考え方が増えるのです。どの組織にも、新しい考え方が注入

されることは必須だと思います。

最後に、「How (どのように)」です。一つ実例を挙げますと、私がアメリカの仏教大学院大学に勤めていた時に、日本からある真宗学の教授が来られて阿弥陀仏の話を書かれた際、アメリカの学生から「阿弥陀仏とは一体何ですか」と質問がありました。その先生は驚いたように、戸惑いながら、「阿弥陀仏とは……そりゃー、阿弥陀仏ですよ！」と言われて、答えにならなかつたのです。教授は、「阿弥陀仏」とは誰もが理解している宗門内の言語は持っていたが、宗門外の言語は持っていなかったのです。これを英語では、内部用の言語を *emic* と言い、外部用の言語を *etic* と、本質的に異なるものと区別します。われわれは *emic* を常に使っています。それは、もちろん必要です。しかし、伝道において外部の人や未信者には、やはり外部・宗門外用の言語が必要となるのです。従って、以上のことは、「How」(どのように)に伝えるかということに関しては、

非常に大切な点になると思います。

以上が、「宗教者はどのような発言をするべきか」に対する私の答えとなります。即ち、パラシュートの如く「開ける・open」べきであるということです。「開かないパラシュート」は失敗です！最後に、初めに話しました「黄金のチェーン」を紹介させていただきます。

“Golden Chain”

「黄金のチェーン」

“I am a link in Amida’s Golden Chain of love that stretches around the world.”

私は、世界中に広がる阿弥陀仏の愛の黄金のチェーンの中の、一つのリンク（結び目）です。

I will keep my link bright and strong. I will be kind and gentle to every living thing and protect all who are weaker than myself.

私は、そのチェーンの一つのリンクとして明るく強く生き続けます。私は、生きとし生けるものに優しく接し、そして私より弱きものを守ります。

I will think pure and beautiful thoughts, say pure and beautiful words, and do pure and beautiful deeds, knowing that on what I do now depends not only my happiness but that of others.

にわたって、詳細な報告がされています。
(総合研究所 教団総合研究室)

私は、清く美しく考え、清く美しく話し、清く美しく行動することに努めます。それは、私の今の行いが、自分の幸福や不幸だけではなく、他の人々の幸福や不幸も左右することを知っているからです。

May every link in Amida’s golden chain of love become bright and strong, and may we all attain perfect peace.”

阿弥陀仏の愛の黄金のチェーンのリンクの一つひとつが明るく強くなり、そして私たちすべてが絶対なる安らぎを得られますように。

佐藤泰之氏が報告された「浄土真宗に関わる実態把握調査」については、『宗報』二〇一八年二月号より六月号の五回